

新居佑

表紙イラスト：ひなぐま



魔法先生ネギま!

マブカルアヤメ



試し読み版

二次元ぶち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔法生徒会長 2 マジカルアヤメ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



魔法生徒会長2

マゾガールアヤメ

新居佑

表紙／ひなくま

登場人物紹介

Characters

い さ き あ や め

伊佐木彩芽／マジカルアヤメ

聖イシュタル学園の副生徒会長。尊敬していた生徒会長の明日菜を捜しだすため、セバスと契約し魔法少女となり、魔物たちと戦っている。

セバス

白い毛並みと赤い瞳をした猫のような生き物。実は魔法の国の住人。彩芽に魔法少女となる力を与え、明日菜の元へと導いていくが…？

す お う あ す な

周防明日菜

聖イシュタル学園の生徒会長。使い魔セバスの力を借りて、生徒たちを守るため魔物と戦っていたが、現在では行方不明となっている。

厳しかった残暑も終わり、穏やかな秋の色がその深みを増していく。

日ごとに短くなつていく太陽が、いまだにその存在を誇っている昼休みの時間。

学園の生徒たちの多くは、忙しい午後の授業に備えて、学食へ出向いたり、持参した弁当を持ちよつたりして、各々ひとときの安らぎを楽しんでいた。

しかし聖イシユタル学園の副生徒会長・伊佐木彩芽は、生徒たちの賑やかな場からいくらか離れた学園の部室棟へと足を運んでいた。

学外から美少女揃いと噂される聖イシユタル学園にあつてなお、彩芽の美貌は一際強い輝きを放っていた。

冬期のセーラー服を纏つた肢体は、すらりとした細身のモデル体型でありながら、女性らしい柔らかかそうな媚肉が過不足なくのつている。

キュッと引き締まつた魅力的なお尻やウエストラインはもちろん、立派に成長した胸の双丘のポリュームは圧巻で、若々しくて張りのある豊乳は、掌にすら余るサイズを誇っている。

エロティックな女体の魅力をより一層引き出すのは、彩芽の整つた美顔だ。古くは武家の家柄であつた血筋を引いたその美貌は、長い黒髪をポニーテールでまとめた姿もよく似合う。

クールな表情から時折漏れる甘い吐息などは、男子生徒垂涎の的だ。

彩芽自身も鋭い印象とは裏腹に、人当たりもよく、また面倒見もよいので、男女問わずに彼女を慕う者も多く、副生徒会長に推されたのも納得の人望だった。

「ここですわね」

何十とある部活動の部室が一同に収められた四階建ての部室棟、その最上階へと階段を早足で昇りながら彩芽は、独り静かに呟く。

『間違いないね。でもまだ出てきたばかりで、活動は始めていないみたいだ。君の感知能力も随分上昇したね。彩芽を見込んだ僕の鼻も高いよ』

彼女の呟きに応えたのは、魔力の素養なき者には聞こえない声無き声だった。

彩芽は、彼女にしか聞こえない声^々を発した肩にのつた生物、白い毛並みに赤い瞳をした猫のような使い魔に、冷静に返す。

「お世辞はいりません。誰かに危害が及ぶ前に倒せれば。いきますよ、セバス」

四階にたどり着き、とある部室の前に立った彩芽は、その切れ長の瞳に強い意志の力を込め、長い黒髪を揺らしながら、その扉を開けた。

「ぐ……うおおおつつつ!!」

電気もついていない、わずかに差し込む日光に照らされた薄暗い部室に、猛獣のような声が響き渡る。

中にいたのは学園の生徒ではなく、異形の形をした一匹の化け物だった。

7

虎のような巨体をしながら、その首は三叉に分かれており、それぞれが口から吐き出す長い舌は蛇のように長く、鋭く裂けた口の切れ目からはボタバタと粘っこい涎がとめどなく零れ落ちていく。

『ケルベロスだね。この前のトルルよりは手ごわいかな。大丈夫かい、彩芽？』

「大丈夫ですよ、セバス。私はこんなところで負けません。私はあの人を……明日菜會長を助けるまでは絶対に負けない！ だから私は魔法少女になることを契約したのだから!!」

弾けた意思とともに、彩芽の肢体がまばゆい光に包まれる。光の収束の後に現れたのは、白と青のかわいらしくも扇情的なコスチュームに身を包んだ可憐な魔法少女の姿だった。

たわわに実った胸と悩ましい股間には、まるでビキニスタイルの水着のような青いコスチュームが装着される。

足には白いストッキング、腰周りは彼女の刃のような性格を現すかのように、鋭角的な真っ白いスカートが彩る。

初々しい肢体を覆っているのは大切なデリケートゾーンを守るそれらだけで、制服に隠れた意外と華奢な撫肩や、引き締めながらもプニプニしていそうな臍の周囲は、まるで彩芽の清純さをひけらかすように、玉のようなすべすべした肌を露にしている。

「魔法少女・彩芽、参ります！」

魔法少女という名に相應しい可憐さと、彼女の内に眠る気高い誇りが合わさった力強さが吐き出される。

「グルルルッ！」

三つ首の異形の番犬は、彩芽に対して明確な敵対の意識を放つと、獣同様に姿勢を低くして青い魔法少女に飛びかかってくる。

「その程度、はああっつ!!」

裂帛れっぱくの気合が迸ったかと思うと、襲いかかってきたはずのケルベロスが、逆に勢いよく吹き飛んで、部室の壁に激突した。

『あのケルベロスを一撃で吹き飛ばすなんて……相変わらずすごい威力だね、その刀は』セバスが大げさに驚いてみせたその武器は、彩芽の両手にしっかりと握られている一振りの魔法刀だ。

魔法少女それぞれの心的性質から構成される魔法の武器。武士の家系である彩芽の場合は、彼女にこれ以上ないくらいぴたりといえる、日本刀を模したものだった。

魔力を使い、瞬時に手元へ呼び出した得物の柄の部分で、迫る化け物に魔力を伴う刀身を食らわせたのだ。

「褒めてもなにもでませんよ。さあ、被害がでないうちに倒します！」

そう言った彩芽の身体が、コスチュームと同じ白と青の魔力の光に包まれていく。両手

で握った魔法刀を寸分の隙もない上段に構え、放出された魔力を刀身に絡ませる。

大技の危険を察知した地獄の番犬が、衝撃から立ち直って、もう一度こちらに鋭い牙を向ける。

「遅いわ！ くらいなさい、必殺・エクスタシーブレイドっつ!!」

淡い光が刃に収束し、青い魔法少女が振り下ろす一撃が、闇の獣を斬り捨てる必殺の剣へと昇華される。

「ぐぎゃあああああつっつ!!」

縦一文字に斬り裂かれたケルベロスが、醜い断末魔の悲鳴を上げる。死体は細かな塵となつて消失し、少し部室の壁がへこんだくらいで、魔物の痕跡はなにひとつ見当たらない。

「ふう、今回も襲われた人がいなくてよかった」

『お見事だね、彩芽。もう君の前の魔法少女、明日菜よりも強くなったんじゃないかな』
剣を光に還して安どの表情を浮かべていた彩芽だったが、軽い口調でセバスが言ったその名前に、わずかに表情が曇る。

「明日菜、会長……」

生徒会副会長だった彩芽が、ふいの急病で学園を欠席したのがおおよそ一月前のこと。それから体調も全快し、学園に再び登校できるようになってから、まだ一週間ほどしかたっていない。

指の平で、しかも衣装越しにわずかに女芯へ触れただけで、これまで頑なに守り通してきた節操観念がひっくり返るほどの強烈な快感が、彩芽の理性を射抜く。

「あ……くううんっつ！ はあぁっ、んんっ……くうっ、んはあっ!! ひ、うううんっ!!」

初めはグリグリとレオタードの上から押し触っているだけだった右の人差し指が、彩芽の意思を離れて、どんどん深く大胆に、発情しきった陰部を刺激していく。

（ううっ、た……たまらないっつ！ 指だけなのに……頭がなにも考えられなくなつて……ん、くうっつ!!）

最早、学園の凛々しき生徒会長・代理、そして正義の魔法少女であるという意識は、初体験のオナニー行為によって生まれた牝の情欲によって、余すところなく征服されようとしていた。

グチヨグチヨ……ジュリイイ……。

いやらしい水音を立てながら、柔らかく熱を持った肉唇を指先の腹で押さえていく。そのたびに、すらつとした喉の奥から、はつきりとした官能の声が艶を増した唇へと送り出される。

「はあ、はあぁ……うう、あぁ……んん」

スーツの上からでは飽き足らなくなった本能が、V字のレオタードをグイッと横にずら

し、隠すもののがなくなった、成熟途中の初々しい女の花弁を剥き出しにする。

『へえ、彩芽のマ○コって、毛が生えてないんだ。ふふ、そんなにいやらしい身体なのに、本当に中身は初心なんだね』

「い、言わないで。き、気にしてるのだから……んああ、わ……私の、すぐく……濡れてる……くうん！」

セバスの指摘通り、ムチムチに育った肉体でありながら、露になった女性器の周りには陰毛一本生えていない。

頬を赤らめて、恥ずかしい思いを表す彩芽だったが、その蕩けた視線は、愛液をドブドブと染み出させている自身のパイパンマ○コに釘づけになっている。

トロトロに濡れた陰唇は、見事なまでのサーモンピンクに充血して、ぷつくりと膨れている。

彩芽が産まれてから、誰にも触られたことのない女の聖域の真ん中には、フリルのようにかわいらしい粘膜のひだがあり、そこに中指大ほどの穴があいている。

（わ、私の処女膜……んく、自分で、オナニーなら……大丈夫。う、くう……んんっつ!!）

慎重にいこうとする理性のブレーキを打ち壊し、牝の性欲が彩芽の指先を、自身の蜜壺へと突き込ませる。

グチユ……!!

遠慮がちな侵入穴の大きさに合わせて、右の一指し指を突き入れたその瞬間、これまで押し殺してきた快感のリミッターが、まばゆいばかりの閃光に晒され弾け飛んだ。

「くひいいいんんっつ!! はあっ、んんんっつ!!」

小さい処女膜の穴からたつた一本……人差し指を挿入しただけだというのに。まだ第一関節しか入っていないというのに、背筋を走る抜ける牝の快感という名の衝撃に、思わず艶っぽい声を上げずにはいられなかった。

（す、すごっつ! すごすぎる……ココおおっ! ぬるつとしてて、熱くつて……まだ入り口なのにギュウギュウ締めつけてくるっつ。それに、それにいいいっつ!!）

彩芽は募る欲求に押されるまま、膣に入れた指を根元までズルッと奥に押し込んだ。

「はあ、はっ! くふうんっ、んっんっ、ふううっ!!」

自らの人差し指が膣道を貫いた瞬間、青い魔法少女の肢体が背中からギュンッと跳ね上がり、指を入れた女芯からブシュウツツ! と粘つく本気汁が溢れ出す。

「あああつ、し……締まるっ。私のアソコが指を、ひぐうんんっ、食い締めてるっつ」

処理速度を大きく超えた悦楽の奔流に、彩芽の理性が飲み込まれる。

あまりの快感の衝撃にギンッと一回固まったかと思うと、次の瞬間には、床にへたり込んだまま自ら前屈みになって、ジユボジユボと突き入れた指を膣の中でピストンし始めた

のだ。

「ゆ、指止められないっ。ひぐっ、あああつ！ んっ、はあはあつ……気持ちよすぎ、んああつ!!」

これまで、頭の中で考えた貞操観念と頑ななまでの意志の強さで、本来あるべき牝の欲求を拒んできた彩芽にとつて、魔法の代償として高めに高められた肉欲がもたらす快感を受け流す術など持ち合わせていようはずがなかった。

（く、おおっつ。なんなのっ、なんでこんなに気持ちがいいの!? お、抑えられない。どんどん、どんどんはまっていくうううっ!!）

誰に教えられたわけでもないのに、女としての遺伝子に組み込まれた情欲の野性が、美しい魔法少女を一匹の牝へと導いていく。

『ふふ、初心だっただけに、一度覚えちゃうと止めようがないみたいだね……どうだい、彩芽。自分で弄るマ○コの味は?』

「ふえええっ!? ココ……マ、マ○コおおおっつ! あ、熱いの、蕩けるの、きつすぎるのおっつ!! 指でズブズブするの……オナニー、やめられないっつ! オマ○コ、あひっ……気持ちいいのっ!」

つい先ほど、恐ろしい魔獣を切り払ったとは思えない乱れぶりに、机の上から見下ろしていたセバスがにたりと笑う。

知識としては知っていたが、恥ずかしくて口にできなかつた淫語。それを覚え込まれるたびにすると口から吐き出され、凜としていた自身の誇りを、自らの言葉で貶めていく。

「あ、あああつっ！ な、なにかくるうつつ!! セバスう、私……変になつちやうつつ！ マ○コつ、彩芽のマ○コ蕩けちゃううつつ!!」

わずかに残る処女膜だけは、という貞操の防波堤こそ守っているため、膣肉を責め立てる指は一本だけだが、火照りに火照った生娘の魔法少女が昇りつめるには十分すぎる刺激だった。

（ほ、本当にマ○コ変になるつつ！ こ、怖いのに指止められないつつ!! もう、なにも考えられないっ!!）

ズチヨズチヨツ、ジユブブツツ！

ただ快楽を貪る衝動に任せて、彩芽は、女蜜に突き入れた人差し指を激しく出し入れさせた。

指の根元までぐっしよりと愛液が染み渡り、ツンツとした香りが、余計に理性を蕩けさせる。

身体が震えるたびに、ぶるんぶるんと揺れる豊かな双乳の先端は、痛々しいほど勃起しきつているのがコスチューム越しにもわかる。

「こ、こっちもいいいい。胸、おっぱい触るだけで……あああつ、痺れちゃう……ズキンズキンって、頭……もつといやらしくなるううっ!!」

手持ち無沙汰の左手、その人差し指と中指で、左胸の乳首を衣装ごと挟み込み、きつく扱きあげる。掌では豊乳をタップタップともみながら、高まり続ける欲求を加速度的に押し上げていく。

「あああつっ、頭真つ白になるっ! どうなるのおっ、私い……いつたいどうなっちゃうのおおっっ!! んひいいいいっ!!」

これまで己を律することに慣れてきた彩芽の中を、どうしようもない淫らな衝動が駆け回る。

未知の世界に突入していく感覚に怖さを感じながらも、グジュグジュの陰部から発する劣情の炎は止められない。

『悩まないで、絶頂するんだ彩芽。そのまま本能に身を任せて、イクッって言えば、エクスタシーに達してしまえばいいんだよ』

「絶頂、イク……エクスタ、シー……!? セバスうっ、私……私いいっつ!」

魔法少女と行動をとにもする使い魔といつても、彩芽はどこか不審な感じのするセバスに完全に心を許すことはしなかった。

けれど今は違う。彩芽がセバスと出会って初めて見せる感情。色っぽい上目遣いに含ま

こんな身体にされ、今まさに堕ちかけているギリギリのところまで我慢している自分の想いを、もう二度と上がってこれなくする最後のピース。

『くくく……』

クリペニスの下、いまだ自分の指以外、何者の侵入も許していない秘園のワレメ。そこに自らの男根とは違う、別の……動物、悪魔的な熱さを感じる。

「やめて……！ いやっつ、お願いしますううっつ!!」

『僕はね、やめて、お願いって言われると……』

今度こそ本当に逃げ出したかったが、正義の誇りよりも、盛りのついた牝の情欲に裏切った牝の本能が、そこから立ち退くことを拒絶する。

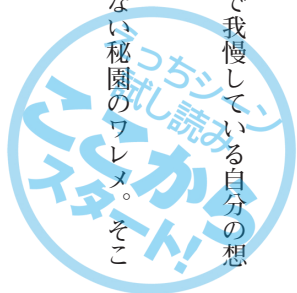
拘束されたワイヤーを引きちぎる力など、半ば堕ちた魔法少女に残っているはずはなく、青い魔法法衣を纏った彩芽は、最初で最後の痛みに絶望する。

『……絶対に堕ちてもらいたくなるよね、彩芽』

ズブリユツツ！ ブチイイユツツ!!

「あ……ああああアアアアアツツツツ!!」

ぬるつとした赤い糸筋が、股間から怖いくらいじんわりと広がっていく。心はおろか、細胞にまで記憶されるのではないかという、計り知れない喪失感が黒髪の少女に嘆きの詩を歌う。



(うう……ひ、ひどい……私の処女、こんな……あっけなく……。あ、明日菜会長も……私、私は……)

大事に大事に守ってきた処女が、望んでいない相手、場所、やり方であつという間に破られる。

「あふうつ、おお……彩芽のチンポオ、チンポオ……くひいうつ！」

助けたかった人は、自分の悲しみなど理解するそぶりも見せず、蕩けた表情でひたすら尻を振り、彩芽の肉勃起を熟しきった蜜壺に招き入れている。

守るものも守りたかつたものも同時に失った。

だが、心に穿たれた虚無感は、新たな被虐の快感によつて補填されていく。そして魔法少女は淫魔へと墮ちる。

『ふふ、動くよ彩芽。君は明日菜を孕ませる。そして僕に孕ませられる。お父さんとお母さん、二つ同時に経験できるなんてね。魔法少女も悪くないだろう?』

「そん……つつ、ひぐうううつつ!!」

最後に残された抵抗の言葉も、膣内で爆発したセックス……レイプといつてもいいかもしれない一方的な突き込みの快感に一瞬にして蒸発してしまふ。

子猫ほどの身体からはまるで想像できない、トロルと同じかそれ以上の凶悪すぎる極太マラが、初めて牡を受け入れるには未熟な膣道を力任せに無理やり押し広げ、突き込んで

くる。

「んおおおつつ!! あっはっ、これえっ!　これが、本物のおおつ……ほおおうつ、チンポおおおおつつ!!」

絶望から一転し、女の悦びへと、彩芽の感情が変化する。

破瓜の痛みや悔しさなど、まるで何万年も彼方の出来事のように思えるこの恍惚感。指でしたときも、この世の天国かと思えた甘美感が、今真正銘の牡チンポに膣内をズキユズキユと突きまわされることによって、何百倍、何千倍……これまで保ってきた自我が吹き飛ばす快感が、女の中心から全身へと走りぬける。

ジュボジュボツツ!　ズチユンズチユンンツツ!!

『初めてだとやっぱりきついね。でも大丈夫。これから何十回、何百回も魔物に犯されれば、明日菜みたいな素敵な牝マ○コになれるよ。そうだろう、彩芽?』

「ひいつつ、んひおおおおつつ!!　イイツツ、あへえ……これ本当にイイのおつつ!!
セックスセックスつつ!!　セバスのチンポと私のクリチンポつつ!　明日菜会長のメスマ○コよすぎるのおおおつつ!!」

タガが外れた彩芽の人間的な常識は、すでに暴走寸前だった動物としての本能を抑えつけられなくなっていた。

「おほおおおおつつ!　そうよ、彩芽ええつつ!　突いてっ、明日菜の牝マ○コつつ。ん

ひいっ、あなたのクリンポでもっと奥までぶち抜いてえええっ!!」

明日菜にされるがままだった彩芽の勃起肉棒は、いまや完全に立場を入れ替えて、牝犬のように尻を高々と掲げている明日菜の女臈を力任せに突きまくっていた。

「き、気持ちいいですか? いいですよ会長っ!!? はおんっっ、いひいっ!! だ、だってこんなにマ〇コきつく締めつけて、おおんっ! 私のチンポ、気持ちよくしてくるんだからっ!」

「もちろんよ、彩芽えっ。今までもっとぶっといチンポを啜えたことあるけど、んぎいいっ!! あなたのが一番ハマってるうう、おいしいっ! んほっ、んふお……彩芽のクリンポが一番大好きよおっ!!」

かつて学園の生徒会長で正義を尊ぶ魔法少女だったとは思えない明日菜の淫乱っぷりに、彩芽は今まで感じたことのないゾクゾクとした征服感を背筋に覚えていた。

（わ、私が会長を犬みたいに四つんばいにさせて、屈服させてる。明日菜会長の素敵な顔を私がぐちよぐちよにして、悦ばせてるうっ!）

慕っていた彼女を、自らの手で壊すことが、たまらなく気持ちいい。

堕ちた心が、青の魔法少女の歪んだ性癖を露にする。

『ふふ、こっちの穴もすっかり変態チンポアクメに夢中だよ。処女を奪われたばかりなのに、ほら……僕のを放したくないって、キュンキュン締めつけてくる』

「あつはあつ。そ、そうですね。セバス様のチンポも最高なおおつ！ イグウ、イグイグッ！ ア、アクメ……っ。そう、牝豚アクメへえっ。わらひ、あんらに嫌いなら使い魔チンポで、変態アクメしてますうっつ！」

淫靡な言霊を自ら紡ぎ、堕ちていく魔法少女。

ドブツ、ドブアアツツ！ と我知らずのうちに、陰唇から大量の潮を吹き散らし、端正な美貌を、白目剥き出しで口は開きっぱなしの壮絶なアへ顔に変化させる。

牡と牝、高まりきった二つの同時快楽に、少女の清らかな心は澱みきり、痴態を晒す自分にすらマゾ的な快楽を感じて、さらに激しくアへっつてしまふ。

「ほおおうっ、イグツツ……チンポでも、マ○コでもイックウウツ！ あひえああつつ、気持ちイひいい、犯すのも犯されるのもほお……っ」

盛りのついた猿のように明日菜の女蜜をピストンしまくり、片方では情欲に溺れた痴女のように、ケツを思いきり突き出して、欲望の赴くままに感じまくる魔法少女。

滲み出した汗は、白と青のコスチュームを汚し、ポニーテールでまとめられた黒髪は、激しく前後に動く腰に合わせて、まるで本当の馬の尻尾のように勢いよく揺れ動いている。「あつ、はあああつっ！ チンポしゅきいっ、らいしゅきれふううっ！ おおっつ、ずつろチンポ繋がっていらひいいっ!!」

一突き、一突き明日菜の女芯を抉るたび、そして自分の子宮の奥底までを貫かれるたび

に、彩芽の精神が確実に壊れ、快楽の虜になっていく。

連続して、それも猛烈な破壊力を持つて頭の中でスパークする快感の爆発に、まともな思考はおろか、舌すらも回らなくなっている。

生徒会長代理として、辣腕をふるっていたクールな面影は露と消え、発情と悦楽のみに支配された哀れな魔法少女の姿がそこにはあった。

「ひゃひいひいんんっつ！ ご主人しゃまああつ、セバスひやまああつ！ お、おおおつ！ 彩芽、もう会長の牝マ○コに出しそうでふうっ！」

『そうかい、僕ももう限界だよ。でもいいのかい、彩芽。ここで本当に欲望に墮ちると、魔物の苗床、牝便所に成り果てちゃうよ。それでも？』

最後の問いかけ。仮にここでセバスの意見を否定しても、なにも変わりはしなかっただろう。

けれど彩芽の正義を愛する魔法少女というプライドだけは守れたはずだ。

「いいいっ！ 苗床、牝便所っ最高でふううっ!! はおおつ、おおおつ、彩芽は契約しまひた。立派な、立派な牝豚魔法少女になるっへええっ！」

自ら下した決断に、彩芽はこれまでで最高の笑顔、牝奴隷としての忠誠を自ら誓った。

「出してくらはいいっ、妊娠っつ！ セバス様の赤ちゃんほひいれふううっ！ おおおおつ、ほおおおんっつ!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>